東北大医保健学科紀要　**23**(2)：47〜51，2014

総　説

紀要についての一考

小 林 悌 二

保健学科前身東北大学医療技術短期大学部・名誉教授

Some Comments with Trial Proposals for Activating the University Bulletin

Teiji KOBAYASI

Emeritus Professor of the College of Medical Sciences of Tohoku University, The Department Preceding to the School of Health Sciences

Key words : Bulletin, Activation, Academic paper, Research achievement

The Bulletin of School of Health Sciences of Tohoku University has been accomplished to publication of twelve volumes containing twenty-third issues with fruitful results in research of various medical fields, taking over the volume system of the Bulletin of College of Medical Sciences with twenty-one issues from 1992 to 2003. It is just an expected situation by the author having concerned with the Bulletin for a long time.

On request from the Editorial Board of the Bulletin of School of Health Sciences, based on experiences on some problems and ideas in supporting the College Bulletin, some comments with trial proposals for activating the School Bulletin further will be given.

1. はじめに

保健学科紀要は，通算 12 巻 23 号を重ねた前身の医療技術短期大学部紀要からその巻号を引き継いで 2004 年度に発刊されてから既に通算 11 巻 21 号の刊行実績を重ね，教育・研究の成果を送り出してきました。前身時代の紀要に深い関わりをもった筆者としてもこの大台に乗った年月の実績を大変嬉しく思います。

この度保健学科紀要編集委員会から，紀要の今後のあり方を考える上の参考の一つとして，前身の紀要の扱いで出会った問題やその取り組み，またエピソードなどを書いていただけると有難いとのご依頼をいただきました。個人的経験からではありますが，これらから幾つかを記し，紀要の活性化と発展について思うところの一端を併せて述べてみたいと思います。

2. 前身紀要創刊の頃のこと

医療技術短期大学部（以下，医療短大）が学生を迎え授業を開始したのは 1973 年度で，発足から 10 余年は教育環境のハード面，ソフト面のまったくの新規からの整備に教職員一体での大変な努力の期間でした。続く数年間，教員各自の医療短大としての教育・研究への努力が実ってきて，それまで各自その専門学会，専門誌で行っていた成果発表に加えて，医療短大独自の発表刊行誌をもとうという声が出始めていました。

この背景には，教育環境の整備充実を図りながらも既に並行して議論を開始していた四年制転換により，医学・医療技術の急速な高度化に合わせた更なる教育向上を図ろうという気運が働いており，医療技術研究成果の投稿の場が多くない分野も含めて全体として研究促進に資する場を設ける

必要性が意識されたものです。

議論が紀要刊行にまとまって，創刊号の巻首に当時の倉科達也部長が詳しく述べられているように強い決意で1992年に初号が発行されました。

この数年前，私は故石田名香雄学長と医療短大の研究環境の工夫ということについて話し合ったことがありました。その折石田先生は，先ず学内に自由な学術サロン的な雰囲気を作ることが大事で，各自がもつ問題や方法をフランクに聞かせたり聞いたりできる交流，研究意識の醸し合いと共有の空気が研究活性によく効く。専門をバリアにしてはだめ。違う専門ともサロン的に自由に交流し合えるのがいい。自分は周りにこの空気を作って研究気風の土壌としてきたと強調されました。

このことは私の物理学の分野でも日本の現代物理学黎明期をリードした例えば長岡半太郎や時代が下った仁科芳雄など，ドイツ，デンマーク等の欧州の研究環境をつぶさに体験した人達が日本に導入し，多くの優れた研究者を育てた研究雰囲気としてよく知られたことと同じであり，印象深く同感を覚えました。専門の異なる多くの教員が構成する医療短大の教育・研究活動の場にこのような自由な交流の雰囲気が身近にできれば，と教員数人とざっくばらんに話し合っていたところに紀要刊行の話が次第に現実化してきたのでした。

教員が教育・研究成果をそれぞれの分野の専門誌に発表することは最も奨められることではありますが，これと相俟って紀要への掲載が活発であると，紀要が組織全体としての活性度が見えるよいバロメータとなり，中からも外部からも大きいメリットとなります。東北大学理学部紀要 The Science Reports of the Tohoku University では専門誌への投稿前にエッセンスをこの紀要に出すことが長く慣行であった程です。

それで刊行実現に向け，数十の大学，研究所の紀要，研究誌からカテゴリー構成や投稿規定・要領を調べ，準備会への協力を始めたものでした。

3. 順調な発行と折々の工夫

創刊号を原著論文10編からスタートした紀要は早速次の巻からは年2回の発行とすることになり，編集委員会の多大な尽力と全学科にわたる教員の積極的投稿が続き，多い号で14〜17編，平均では各号11編以上の原著掲載を得て，医療短大紀要として12巻通算23号，原著256編の発表の場となり，教員相互の刺激合いと成果の対外的提供の媒体となりました。

この間，紀要編集に伴う問題や導入された工夫の中から幾つか例を挙げてみようと思います。

・査読について

論文の質を保ち，評価される論文とするためには適任の査読者が当たることが重要です。医療短大として刊行する紀要であるから学内教員が査読に責任をもって当たるべきであるということが基本とされましたが，医療短大教員構成の特徴として，ある専門について教員は一人というケースが多く，論文内容によっては学内に査読適任者がいないという場合があります。そこで査読は原則として本学専任教員によるという形をとり，場合により医療短大外に査読を依頼することがあるという含みが込められました。学内査読はもちろんペイなしですが，学外依頼の場合の査読謝礼についてどうするかが話題にはなりましたが，無料となりました。他学部教員に実際に査読を依頼したケースがあります。私が後に関係したある国立大学の保健学科では学内，学外査読委員の2名による査読制を採っていますが学外委員も無料です。

・医療短大研究会の要旨の掲載

医療短大では1996年度から医療短大研究会を広く公開で開催し教員の研究紹介を行ってきて，2002年度までに計29回実施，この要旨をその近号の紀要に掲載しています。研究会では各教員の最新研究が分りやすく紹介され，他学科教員からも質問，コメント，アドバイスが得られる交流の機会となって，病院，他学部，学生の聴講もよくみられました。

・国立情報学研究所による紀要の電子化公開

編集委員長であった2002年，国立情報学研究所による大学等紀要の電子化事業が開始されることになり，このシステムに加入することによって紀要論文が目に触れる機会，活用される機会・範囲を広げることができると考え，編集委員会に

諮って教授会に提出，加入には原則的に全掲載論文の著作権がその刊行機関に帰属していることが必要のため教授会の審議，決定を経て加入が決定されました。これに伴って著作権項目を加えた投稿規定案も承認されました。

加入に伴う著作権の取り扱いについて，教員，退職教員，共著者へ広く周知が必要なため 12 巻 1 号（2003）に「紀要掲載論文等の著作権の取扱いについて」を掲載，この電子化により 1992 年の初号に遡って全文可読方式でインターネット上から利用できることとなりました。

・大英図書館による継続収集

The British Library（大英図書館）の日本科学技術情報部門から紀要の定期寄贈の依頼があり，刊行毎に一冊を継続送付することとし，被検索機会の増大を期することにしました。

・紀要予算の増大

前記のように投稿論文数が多いため，予算案への計上にはいつも事務部の苦心がありました。医療内容，理工学内容の投稿論文に多いカラー使用の図，画像，写真等について，効果上に重要なカラー使用のまま印刷できればよいのですが，印刷経費が高くなって予算内では無理であるため，カラー印刷を特に希望する投稿者は研究費で賄うことにしましたが，投稿者は結局モノクロ印刷で支障の出ない諧調設定や表現の工夫に努め，査読者も留意してそのアドバイスを行ったものです。

4. 紀要の問題と活性化への一考

紀要は各自の教育・研究成果の発表の場としてだけではなく，前述のように，どのような教育・研究に取り組んでいるかがその組織内で互いに知り合える場，交流・共同の芽が身近に生まれ易くなる場，かつ外部からはその組織が全体としてどのような活性度，研究状況をもっているかその一端を把握できる場としても機能します。

着想や手法の面白さはその専門分野の者だけに関心がもたれるわけではなく，同業者だけに役立つわけではないので，専門の異なる学科や専攻からなる大学等ではそれに接する機会としての紀要は，研究紹介の講演会などと同様によい場になります。異分野の話を聴くのが好きな私も時に刺激を受けることがありました。

ところが最近，投稿がかなり減ってきて問題となることがあるということを聞きます。

その主な理由の一つは，紀要は local であまり読まれないだろうという先入観（そういう本人もあまり読まないかも），もう一つは，紀要は業績評価において重きをなさない（なさせない）風潮にあると考えられます。一般にこれらには組織内に限定される査読のあり方も関係していると思われます。

最近はとみに教員が業績蓄積と研究費への外部資金獲得の工面に忙しく，余裕がなくなった反映とみる大学の例が多くあります。外部との共同による成果の発表先はほとんど外部誌になることも関係します。

業績々々と言われる状況は，できるだけインパクトファクターの高い学術専門誌への掲載へと誘われる傾向を強め，紀要のもつ役割の一つにある活性へのビタミン的働きの余裕の醸成などは忘れられることになります。

紀要にとっての査読のあり方はどこでも大きな問題になっています。各専門の教員構成が限られている中で，客観的評価に耐える論文とするための適任査読者を選ぶことが常に可能とは限らないことがよく起こります。当該論文への査読者名は当然守秘されますが，限られた組織内では推測されることもあるでしょうし，狭い中での厳しい査読意見の添付は難しいこともあると感ずる人もおられるでしょう。

しかし，査読の目的は本来，よりよい論文にするためにアドバイスすることであり，意見には必ずそのために立脚する根拠が示されます。専門家同士の間では意見と反論の交互作業は自由でなければならず，そのような気風が極く自然なこととして日ごろの研究環境醸成の中で行われていれば問題ないことです。最初に書いた学術サロン的な気風を作ることの大事さはここに通じます。

適切な査読のために査読委員を複数制にすることや，その分野に適する学外査読委員を含めることは有効な方策です。付随問題をなんとか解決し

てこれを実施している例が実際にあります。

業績の件に戻りますが，業績の定義が曖昧なまま大手を振って走っています。評価の基準として，論文の形態やその掲載誌による細い点数化も行われています。必然として論文作りが目的になる面が強まる弊害はつとに指摘されています。

四年制化を控えていた時期，医療短大でも個人業績の蓄積として紀要の活用も図っていましたが，世知辛い点数化の空気ではなく研究の実を積もうという空気で頑張っていたものです。

国立大学医療短大部の総合教育協議会の理事，会長であったこの時期，協議会もこの四年制転換の大きな問題を鋭意検討していた時期で，文部省，2001 年からの文部科学省へ毎年出向いていたある時，担当者との非公式の話の中ではありましたが，一般に紀要論文の著者が非常に多いケースがあるが，業績として扱うのは筆頭者を含めた最初の 3 名程度，あとは参考資料として見るだろう，ということを言われたことがありました。

分野，研究内容にもより，何より研究方法の特性にもよることであり，このような機械的扱いは問題ですが，審査対象人数，論文数の多さからは実務上やむを得ないことかも知れませんが，紀要は業績とされないのではないかとか点数が非常に低いのではないかとの極端な推測があったのと違って，定期学術刊行誌上の掲載として紀要論文が業績として扱われる点がはっきりしたことでした。

実際に紀要論文の著者名欄に多くの関与者名が記載さる例が多くあるため，研究内容，方法による必然の場合があることを承知の上で，参考上の情報として上記のことを，投稿論文の作成では実質寄与者，協力者，補助者の中から適切な連名著者範囲と記名順にすることが必要になることを教授会で報告したことがありました。

多数連名の場合，どのような人達が関わった研究かが読み手に伝わる利点がありますが，学術論文では，著者記載を実質的寄与者・議論者，実効的協力者に絞り，他の関与者については関与の内容，形態を示して謝辞に挙げる方法を採るのが通常で，単に網羅的な連名記載と受け取られることを避けるのが，上記のような業績扱いの仕組みでは留意すべき点です（人事書類上に当該研究への寄与説明を付記する欄がある場合は明確ですが）。

紀要は業績目的だけの刊行物ではなく，自由度の大きいものであってよいと思います。

原著論文の掲載だけではなく，例えば，

○専門学会誌，専門 Journal 等へ本論文化して投稿する前のエッセンス版，紹介版

○頁数制限のきつい Journal 等では詳細データや計算詳法を載せる余地がないが当該分野研究者にとって有用な材料となるものの掲載

［紀要，研究報告誌をこのような supplement 型としても活用している内外の著名大学や研究所が多くあり，その別刷が交換資料としてよく利用されています。］

○出席した国際会議，国際シンポジウム，ワークショップ，ミーティングなどの概要紹介・報告

○これらの発表要旨（Conference Abstract などの版権に抵触しない形で）の紹介

○担当した市民公開講座，社会貢献などの紹介・報告

○所属学会の注目すべき話題とその動向の紹介

○“Short note” や “Letter to editor” 型の短編枠の設定

○院生の論文活動奨励への活用

○年間業績目録等の総覧掲載

［全教員の年間活動実績を，例えば
業績目録（学術論文および著書）
学会活動（学会および研究会発表）
学術講演および社会活動
による総覧リストとして掲載。

紀要の公知媒体としての役割に沿う掲載内容として相応しく，教員相互においても活動の全体像を知り合い，刺激となる。］

などが挙げられます。自由度の拡張を図り，研究交流誌としての面の工夫を加えれば，次第に活性の方向へ向えるのではないかと思います。

専門誌への投稿だけではなく，論文 10 編中 2〜3 編は紀要に投稿し研究の一端を知り合える材料にしようというような気持ちをもちながら，上

記のような工夫にも関わるならば，紀要を刊行する組織の一員としてこれを育てることに与り，責任をもち合えることになると思います。

編集委員会は担当巻号の編集･発行だけでなく，長期的なあり方，計画の検討にも絶えず意を用い，提言していくことが必要と思います。

保健学科紀要でも実施されているように，電子化による公開が広く行われるようになった現在，アクセスされる機会が次第に増しており，検索される論文の評価はもちろん，紀要全体も評価対象になり易くなりました。魅力を付ける工夫の必要性は電子化以前よりずっと高くなったので，編集委員会が中心となって，教員ともども対応の工夫を考えていくことが大事であると思います。

5. おわりに

保健学科紀要が巻号を引き継いだ前身の医療短大紀要時代に編集委員，編集委員長として関わり，紀要のいろいろな問題と対処の幾つかに当たった経験と，研究成果の一端から紀要投稿を極力続けてきた経験を通して，紀要刊行の目的，紀要がもつべき機能，性質とその期待，および昨今大学紀要がしばしば直面している問題とその対処などについて，刊行組織体の責任と紀要活性化について一考するところを記してみました。

固定観念から抜けた幅広い発想がどの面においても効を発揮しているこの時代，業績々々と急き立てられる環境，電子化公開の環境という変化の中で，紀要が刊行の目的に沿い，より活性化，活用化に向っていくことを期待します。